

肅總兵管宋晟に勅し、倣備せしめた」と記して居る、永樂三年元日は、一四〇五年一月三十一日に當つて居るから、帖木兒出軍の報を聞いて直ちに防禦策を講じたものと思はれる、宋晟は涼州の鎮將として前後二十餘年間西邊鎮撫の任に當つた人で、屢々功を邊陲に立てた人であるが、此の際如何なる計畫を立てて居つたかは全く解らない。

かゝる間に帖木兒の方では準備全く出來て、モーガリスタンの王にも案内かたがたの援助を迫り、自からは一四〇五年一月八日に都を後にして此の征途に上つた、まだ支那では何等の防禦も講じやうとして居ない、永樂二年の十二月八日のことである、かくて氷上にシル河を渡つて、二月二十七日には同じ河畔の訛打刺オトラールと云ふ地について、本營を此處に駐めて居つたが、その三月二十五日から不幸病の爲に侵されて、四月一日（回曆八〇七年 Schaban 月十七日水曜日）の夜終にあへなく歿してしまつたのであつた。

永樂帝の文武兩道に於ける盛名は今更記する要はない、世間往々にして帖木兒を以て一個蠻族の酋長にすぎぬ如くに解するものもあるが、それは大した誤である、彼が博く其の時代の知識に通曉して居つたことは學者が既に論じて居る、チャガタイトルコ語文學の黄金時代が、帖木兒に始まつてバベルに終るといふのも定評である、彼が學者の保護に勉め、美術工藝の奨励にも意をとめて、首府サマルカンドの名を四方に傳へ、此の地の名高き科學研究の基を開いた功績も記せねばならぬ、更に彼の自傳と其の法制とを見るものは、如何にしても彼を一個修養ある君主と稱するを拒まぬであらう、たゞ彼の不撓不屈の性質を以て、當時戰を事とする世の中に生れ出たのであつたから、従がつて彼の生涯は戰に終り、やゝもすれば殘酷、壓制、野心家等の好ましからぬ評を招くに至つたけれども、かゝる類例は世界の偉人に就て片端から數へ得べきことで、必らずしも彼を貶する所以ではなからう、かくて